

例 言

- 1 本書は、『古代東アジアの金属製容器』の第1分冊として、中国を取り扱ったものである。2004年度には、韓半島と日本を対象として、第2分冊を刊行する計画である。
- 2 本研究は、1992年度から1995年度に奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部と埋蔵文化財センターが実施した法隆寺所蔵金属製容器の考古学・科学的調査の成果や1997・1998年度の科学研究費補助金（基盤研究C：代表 毛利光俊彦「南都七大寺所蔵青銅製容器の形態と製作技術に関する編年的研究」課題番号09610416）の成果、そして筆者がこれまでに蓄積した日本各地の古墳・寺院等出土金属製容器資料や古代中国・韓半島の金属製容器資料を基として、日本・韓半島・中国の主として古代の金属製容器の編年と相互比較を試みようとしたものである。
- 3 『古代東アジアの金属製容器』Iでは、漢代は銅製容器がほとんどだが、三国時代からは金属製容器が少ないため、陶・瓷器で補ったことをお断りしておく。
- 4 本書は毛利光俊彦が執筆、編集した。本文の入力や図面作成にあたっては、花谷めぐむ・八木あゆみさんの多大な協力をえた。また、上田素土子・東仁美・菊川弥生・脇田涼子・野秋百代・吉村旭輝（帝塚山大学院生）・上地美智子（天理大学生）さん達の助力もえた。